

153 妊婦リンパ球 IL-2R 発現能の長期追跡およびステロイドホルモンの関与について検討

岩手医大

今井俊彦, 西谷 巖

〔目的〕リンパ球は抗原刺激により IL-2R を産生し、そのリガンドである IL-2R を介して増殖する。これらの相互作用が免疫応答の強さを規定する。そこで、本研究では、妊娠中のリンパ球 IL-2R の経時的推移を明らかにする目的で、同一症例を長期間追跡し、CD3 抗体刺激にて発現した CD4⁺T, CD8⁺T 細胞の IL-2R (P55) 発現能およびステロイドホルモンによる影響を検討した。〔方法〕同一症例を妊娠を確認した時点から毎月採血し単核球を分離、CD3 抗体 10 μ g/ml 添加培養、24時間、48時間、72時間後の CD4⁺T 細胞、CD8⁺T 細胞の IL-2R 発現率を FCM にて 2 color 解析した。また、17 β -estradiol (E) 50 μ g/ml, 50 ng/ml, progesterone (P) 20 μ g/ml 0.2 μ g/ml 添加時の IL-2R 発現による効果も検討した。〔成績〕①非刺激時の IL-2R 発現は妊娠中を通して 2% 以下と一定だった。②CD3 刺激により CD4⁺T 細胞、CD8⁺T 細胞とも 48 時間後に最大の発現率を認めた。③CD3 刺激による CD8⁺T 細胞の IL-2R 発現率は妊娠中を通して 28~35% と、ほぼ一定であったが、CD4⁺T 細胞の IL-2R 発現率は妊娠 20 週より低下傾向を認めた。④CD4⁺T 細胞の IL-2R 発現は (E) 50 μ g/ml 添加群、(P) 20 μ g/ml 添加群にて抑制を認めたが、CD8⁺T 細胞では抑制されなかった。

〔結論〕CD4⁺T 細胞における IL-2R 発現の抑制は妊娠に伴い増加する液性因子による可能性があり、妊娠中期以降は免疫反応が変化していることを明らかにした。

154 分娩時母体血中 β -Endorphin の動態について

徳島大

中川 康, 出口圭三, 福家義雄, 青野敏博

【目的】妊娠末期、分娩時に母体血中 β -Endorphin (β -Ep) が増加することが知られているが、その臨床的意義についてはいまだ充分の知見が得られていない。そこで生理的意義を明らかにするために、分娩時における母体血中 β -Ep の動態について検討を加えた。【方法】同意を得た妊婦 (54 名) より、分娩進行にともない、3 回以上、母体肘静脈より、10% EDTA, trasyolol 添加冷却採血管にて採血し、直ちに遠心分離後測定まで -80℃ に保存、インクスター社製 β -Ep RIA kit を用いた 2 抗体法により測定した。測定結果は、頸管開大度、分娩開始時の頸管熟化度、陣痛発作時間、分娩所要時間、分娩様式との関係を比較検討した。【成績】①母体血中 β -Ep は、頸管開大度 ($p < 0.01$, $r = 0.679$)、陣痛発作時間 ($p < 0.02$, $r = 0.612$) と正の相関を示したが、分娩所要時間との間には相関を認めなかった。②児娩出時の母体血中 β -Ep は正常分娩群に比べて、吸引分娩群が有意に高値であり (97.5 \pm 14.8 pmol/L VS 72.6 \pm 11.5 pmol/L, $p < 0.05$)、帝切分娩群は有意に低値であった (42.8 \pm 15.6 pmol/L VS 72.6 \pm 11.5 pmol/L, $p < 0.01$)。③初産婦は経産婦に比べ、児娩出時の母体血中 β -Ep (88.3 \pm 10.6 pmol/L VS 65.2 \pm 9.9 pmol/L, $p < 0.05$) は、有意に高値であった。④分娩開始時の Bishop score が 5 点以下の群では、6 点以上の群と比較し、児娩出時 (88.2 \pm 14.3 pmol/L VS 69.2 \pm 12.8 pmol/L, $p < 0.05$) に母体血中 β -Ep が、有意に高値であった。【結論】分娩時母体血中 β -Ep は、分娩の進行とともに著増し、陣痛に対する心理的、肉体的ストレスが強い症例群では高値を示したことから、陣痛に対する疼痛緩和作用に関与していることが示唆された。